平成 19 年度

職業和裁技能検定

学科模擬試験試験問題集

（　1 級　）

愛知和服裁縫業協同組合

社団法人 日本和裁士会愛知県支部

職業和裁技能検定１級学科模擬試験問題集

平成19年度

１．基礎知識

① 次の説明文の（　　）の中に適当な語句を記入しなさい。

（１）　レーヨンはパルプやリンターを原料として作られた（　　）繊維である。
（２）　短繊維を平行に並べて撚りをかけて作った糸を（　　）という。
（３）　糸の撚り数の密度が１ｍの長さで1,000～3,000回撚ったものを（　　）という。
（４）　代表的な帯地の一つである（　　）は、平織の変化組織であるが斜文風に織りあがる。
（５）（　　）は家蚕絹に較べ繊維が太く、光沢も強く、強度も大きい。
（６）　生糸のときに、精錬加工をした糸で織ったものを（　　）という。
（７）　鉱物繊維の石綿は（　　）繊維である。
（８）　眉のような三日月形の草と水玉を組み合わせた模様を（　　）という。
（９）　型染めに使用する型紙は、和紙を数枚張り合わせ、それに（　　）などを塗って耐水性をもたせてある。
（10）　アセテートやトリアセテートは（　　）繊維である。
（11）（　　）繊維やスチール繊維は無機繊維に属する。
（12）　石油や天然ガスを原料とした中間体化合物を経て作られる繊維を（　　）繊維という。
（13）　繭から引き出したままの糸は２本の（　　）と、それを包むにかわ質のセリシンでできている。
（14）　糸の太さの表示には番手法と（　　）とがある。
（15）　織物の三原組織とは平織り、綾織り(斜文織り)、および（　　）のことである。
（16）　蚕の繭からとったままの繊維で、まだ精錬を施していないものを（　　）という。
（17）　糸の撚りにはＳ撚りとＺ撚りがあり、Ｚ撚りは（　　）である。
（18）　鯨尺の1尺2寸は約（　　）㎝である。
（19）　異なった素材を混ぜて紡いだ糸を使って織った織物を(　　)という。
（20）　２匹またはそれ以上の蚕が作った繭のことを（　　）という。
（21）　ポリアミド系繊維に対して用いられる一般名は（　　）である。
（22）　２匹の蚕が、共同して作った繭から取った糸のことを（　　）という。
（23）　牛車の車輪を文様化したものを（　　）という。
（24）　１デニールとは（　　）ｍで１ｇの重みのある糸のことをいう。
（25）　木綿に絹のような光沢をもたせるためにする特殊加工を（　　）という。
（26）　長襦袢の仕立てで、鳩胸の人は長襦袢を着ると前が上がるので、身八ツ口に（　　）をとって前丈を長く取るとよい。
（27）　色の三原色は（　　）、光の三原色は（　　）である。
（28）　花・草・樹木などを染色原料として染めたものを（　　）という。
（29）　鮫小紋など柄の向きが一方向に向いている時の衿肩明きの切り方は（　　）にする。
（30）　奈良時代の代表的な染色法で絞り染めのことを（　　）という。

② 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。

１（　　）観世水とは渦を巻いて流れる水を文様化したものである。
２（　　）唐草文様は日本古来より伝わる代表的な文様で、つる草の絡み合う様子を連続文様にしたものである。
３（　　）吉祥文様はめでたい、えんぎがよい時に用いられる代表的な古典文様で帯などにも広く用いられている。
４（　　）四君子文様は蘭、竹、菊、桜を組み合わせたものである。
５（　　）椿の花を図案化した文様を唐草文様という。
６（　　）京小紋は多くの色を使って染められるが、江戸小紋は単色染めが多い。
７（　　）有職文様は、平安時代の宮中において有職者が着用した格調の高い文様である。
８（　　）野蚕絹には柞蚕絹と天蚕絹があり、前者は緑黄色、後者は茶褐色を帯びている。
９（　　）羊毛の吸湿性は天然繊維の中で最大である。
10（　　）植物繊維は酸に強く、アルカリ性に弱い。
11（　　）ろうけつ染めとは、染料にろうを溶かして模様を染める方法である。
12（　　）七宝文様とは七福神が宝船に乗っている模様である。
13（　　）亀甲模様とは八角形の亀の甲をみたてたものである。
14（　　）繊維は大別すると天然繊維と化学繊維に分けられ、天然繊維には動物繊維と鉱物繊維がある。
15（　　）槌模様とは工具の槌を輪の回りに取り付け車状に表したものである。
16（　　）山水文様とは、山水画風に描いた文様である。
17（　　）１個の家蚕繭から取れる生糸の長さは、繭の大小によって差があるが、約600～700ｍ位である。
18（　　）化学繊維は再生繊維、半合成繊維および合成繊維に分類することができ、レーヨンは再生繊維、アセテートは半合成繊維およびポリエステルは合成繊維である。
19（　　）井桁文様とは井戸の井の字を図案化したものである。
20（　　）辻ヶ花とは、絞りと文様を組み合わせたものである。
21（　　）奈良時代の代表的な染色技術を三纈というが、そのうち纈纈は現在ろうけつ染めとして受け継がれている。
22（　　）天然繊維や再生繊維は水分率が低く、静電気が起こりやすい。
23（　　）レーヨンと麻は水に濡れると強度が増す。
24（　　）市松模様とは松の木を図案化したものである。
25（　　）石綿はアスベストとも言い、鉱物繊維である。
26（　　）レーヨンは、木綿に比べ色合いよく染まらない。
27（　　）寛文模様は、肩裾の模様をポイントしたものである。
28（　　）三日月形の芝に露の小玉を点々と散らした文様を露芝文様という。
29（　　）浅葱色（あさぎいろ）とは、淡い黄色のことである。

③ 次の織物の産地を下の語群から選び（　　）の中に番号を記入しなさい。

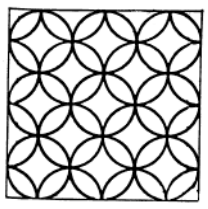
《織物名》

A　紅花紬　（　　）	B　丹後ちりめん（　　）	C　有松絞り　（　　）	D　能登上布　（　　）
E　久留米絣（　　）	F　唐棧縞　（　　）	G　米沢お召　（　　）	H　紅型　（　　）
I　厚司織　（　　）	J　松阪木綿　（　　）	K　佐賀錦　（　　）	L　黄八丈　（　　）
M　郡上紬　（　　）	N　村山大島　（　　）	O　八重山上布（　　）	P　塩沢お召　（　　）
Q　上田紬　（　　）	R　小干谷縮　（　　）	S　紫根染　（　　）	T　備後絣　（　　）
U　仙台平　（　　）	V　大和上布　（　　）	W　伊那紬　（　　）	X　五泉平　（　　）
Y　結城紬　（　　）	Z　大島紬　（　　）	a　足利紬　（　　）	b　弓浜絣　（　　）
c　浜縮緬　（　　）	d　加賀友禅　（　　）	e　阿波しじら（　　）	f　ぜんまい織り（　　）
g　久米島紬（　　）	h　伊予絣　（　　）	i　白山紬　（　　）	

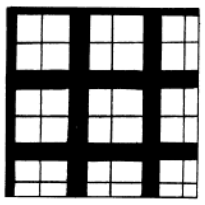
〔産地語群〕

1　秋田県	2　宮城県	3　山梨県	4　岩手県	5　山形県	6　千葉県	7　鹿児島県
8　沖縄県	9　愛知県	10　奈良県	11　茨城県	12　長野県	13　佐賀県	14　福岡県
15　滋賀県	16　三重県	17　広島県	18　静岡県	19　北海道	20　岐阜県	21　東京都
22　愛媛県	23　新潟県	24　石川県	25　高知県	26　京都府	27　栃木県	28　徳島県
29　鳥取県						

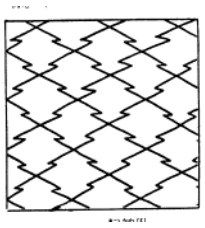
④ 次にあげる文様(模様)の名称を下記語句から選び、該当する欄にその記号を記入し、語句の(　)にふりがなを記入しなさい。



A（　　）



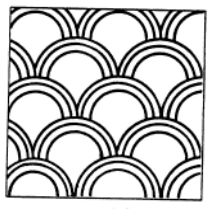
B（　　）



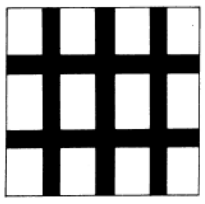
C（　　）

D（　　）

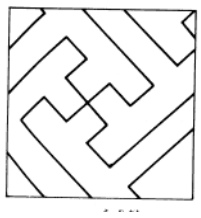
E（　　）



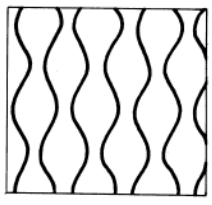
F（　　）



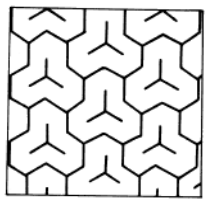
G（　　）



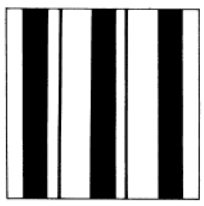
H（　　）



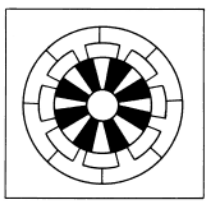
I（　　）



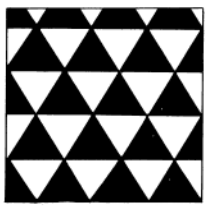
J（　　）



K（　　）



L（　　）



M（　　）

N（　　）

《語句》

① 亀甲　（　　）	② 翁格子　（　　）	③ 立涌　（　　）
④ 松皮菱（　　）	⑤ 源氏車　（　　）	⑥ 弁慶格子（　　）
⑦ 鱗　（　　）	⑧ 檜垣文　（　　）	⑨ 青海波　（　　）
⑩ 七宝　（　　）	⑪ 紗綾型　（　　）	⑫ 観世水　（　　）
⑬ 子持縞（　　）	⑭ 毘沙門亀甲（　　）	

2．基礎技術

① 和服の寸法と身体各部の寸法の関係について、記入しなさい。

1．本裁男物長着の身丈＝　　を基準とする。

2．本裁女物長着の衿肩明＝　　を基準とする。

3．本裁女物長着のゆき＝　　を基準とする。

4．本裁女物長着の褄下＝　　を基準とする。

5．本裁女物長襦袢の身丈＝　　を基準とする。

② 次の説明文の（　　）の中に適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．身長165㎝の女性の長着の身丈は（　　）位が適当である。
2．身長160㎝の女性の長着のゆきは（　　）位が適当である。
3．身長159㎝の女性の長着の褄下は（　　）位が適当である。
4．首回り36㎝の女性の長着の衿肩明きは（　　）位が基準となる。
5．身長163㎝の女性の長襦袢丈は（　　）位が基準となる。
6．婦人用袖付けを付け違いにする場合は（　　）を長くする。

③ 次の文章のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）和服の裄は手首を腰にあて、背の最上部中央から肩線、腕に沿って手首まではかる。
2．（　　）太った人は普通、繰越と衿肩明きは大きくする。
3．（　　）ハト胸の人は胸幅を広くするために衽下りを多くするとよい。
4．（　　）女物の褄下寸法は衿先に腰紐がかかるようにすると着くずれしにくい。

④ 次にあげる紋の名称を下記語群から選び、該当する欄にその番号を記入し、語群の（　　）にふりがなを記入しなさい。

A（　）　B（　）　C（　）　D（　）　E（　）　F（　）　G（　）　H（　）　I（　）　J（　）　K（　）

【語群】
① 下り藤（　　）　② 横木瓜（　　）　③ 五三の桐（　　）
④ 花菱（　　）　⑤ 抱き茗荷（　　）　⑥ 揚羽蝶（　　）
⑦ 三つ柏（　　）　⑧ 九曜星（　　）　⑨ 沢瀉（　　）
⑩ 梅鉢（　　）　⑪ 蔦（　　）　⑫ 桔梗（　　）
⑬ 三ッ葵（　　）　⑭ 丸に井桁（　　）　⑮笹籠胆（　　）

3．長 着

① 次の文章のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）本裁男物長着の内揚位置は後より前を低くし、その位置は着用時に帯でかくれるように配慮する。
2．（　　）本裁女物長着の裾回しが短尺物の場合、前身頃から袖口布を取るとよい。
3．（　　）両面使える布でなければカギ衽裁ちにできない。
4．（　　）女物長着を仕立てる場合、胸の高い人は肩山から剣先までの傾斜を大きくし身八ツ口も長くした方がよい。

② 次の説明文の（　　）の中に最も適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．本裁女物長着で、共衿２枚取りに裁つ場合、小幅物では約（　　）位、普通より余分に布がいる。
2．本裁女物長着をW幅物で仕立てる場合、布は約2.2m～2.3m（　　）位必要とするが、
ヤール幅では（　　）位必要である。
3．婚礼用振袖をお引きずりに着用する場合、身丈は普通、身長＋（　　）位にするとよい。
4．留袖用付け比翼の要尺は小幅物で（　　）位あればできる。

③　本裁女物長着の柄の配置について注意すべきことを、５つ述べなさい。
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

4．羽 織

① 次の文章の説明が正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）羽織を追い裁ち（順送り裁ち）にする場合、前身頃の柄を上向きにする。
2．（　　）羽織の衿を鉄砲付けにする場合、前後の襠を付けてから衿付けをする。
3．（　　）単羽織を裁つ場合、普通前落としから袖口布と襠布がとれなければならない。
4．（　　）男の羽織袴姿が礼装になったのは、江戸時代初期である。

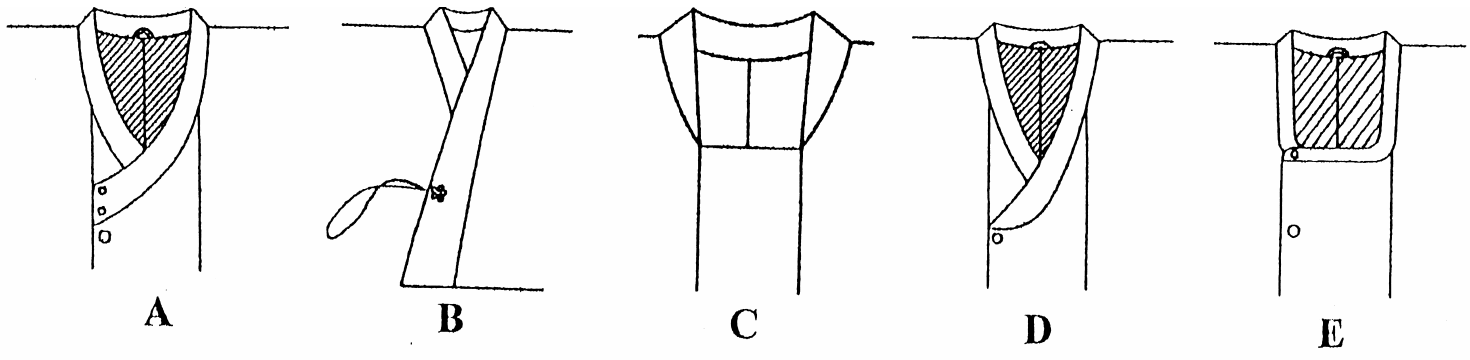
② 次の羽織に関する説明文の（　　）の中に適当な語句、寸法を記入しなさい。
1．半反の反物で羽織を作る場合、普通、前落としを（　　）に用いる。
2．男物肥満体の羽織の襠にする特殊な工夫を（　　）という。
3．男物羽織のくりこし寸法は普通（　　）位である。
4．無双羽織の胴接ぎは、前裾か（　　）でする。
5．本裁ち女物羽織の身丈は（　　）を基準とする。
6．本裁女物羽織の衿布は、羽織丈に（　　）位加えたものを２倍とればできる。

5．コート

① 次の文章の（　　）の中に適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．道行コートや都衿コートの胸明寸法は標準で（　　）位である。
2．都衿コートで表要尺が不足した場合、一つの方法として下前身頃裁切り丈を（　　）位長くとればできる。
3．雨コートの身丈は（　　）位を基準とし、体型、その他により加減するとよい。
4．千代田衿のコートの表生地は、小衿布分として普通（　　）位必要である。

② 次の文章のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）道行き衿の雨コートでは、普通のコートより竪衿下がりを４㎝位少なくする。
2．（　　）被布衿コートは、襠を付けて仕立てるのが普通である。
3．（　　）千代田衿は都衿より竪衿下がりが少ないので竪衿丈を長くする。

③ 次のコート衿型を（　　）の中に記入しなさい。



（　　）　（　　）　（　　）　（　　）　（　　）

④ 次の雨コートの縫製に関する記述のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）太っている人は、前下がりをつけるとよい。
2．（　　）やせている人は、胸明を下げるとよい。
3．（　　）防水加工は、織る前の糸に防水加工をしたものである。
4．（　　）体形にあわせるため必ず仮縫いをしなければならない。

6．日本服装の変遷

① 次の説明文の（　　）の中に下の語句の中から適当なものを選びその記号を記入しなさい。
1．平安時代の女性の外出姿に（　）というのがある。
2．平安時代の貴族階級の女性の正装を晴装束あるいは（　）という。
3．現在、着用されている女袴は（　）頃より用いられたものである。
4．平安時代の女官の正式礼装である晴装束は、十二単あるいは（　）ともいう。
5．素襖（すおう）は武士の礼服であり、紋のついたものを特に（　）という。
6．平安時代の公卿の装束は（　）である。

《語句》A.昭和時代　B.大正時代　C.明治時代　D.江戸時代　E.室町時代　F.被衣
G.十二単　H.大紋　I.直衣　J.袿姿　K.狩衣　L.石持
M.女房装束　N.壺装束　O.室町時代　P.水干　Q.コート　R.合羽　S.束帯

② 次にあげる左側の語句のふりがなを（　　）の中に記入し、右側の説明文で関連のあるものを線で結びなさい。

纐　纈（　　）	1．女官の正装で女房装束あるいは十二単という。
束　帯（　　）	2．奈良時代の代表的な染色技法で絞り染めのことである。
直　垂（　　）	3．ポルトガル語が語源で、西洋のマントを真似たもの。
晴　装　束（　　）	4．武士が鎧下に着用した物で、後に武士の公服となったもの。
合　羽（　　）	5．平安時代を起源とする公卿の正式礼装のことをいう。

③ 次の裃（かみしも）についての記述のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
ア．（　　）普通の袴である。
イ．（　　）肩衣（かたぎぬ）と袴である。
ウ．（　　）肩衣（かたぎぬ）である。
エ．（　　）宮司がはく特別な袴である。

7．着 装

① 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）糸錦、唐錦の丸帯・袋帯は婦人第一礼装用になるが、綴織りのものはそうはならない。
2．（　　）婦人正式礼装には羽織は着用してはならない。
3．（　　）婦人用色無地紋付長着は帯をかえれば、慶弔いずれの場合も略礼服として着用できる。
4．（　　）鮫小紋の長着に紋を付けていた場合は略礼装として着用できる。
5．（　　）被布は室内で着用できるが、被布衿コートは室内での着用が認められない。
6．（　　）絵羽織は礼装用として用いられる。
7．（　　）黒喪服には必ず黒の帯しめと黒の帯あげを用いなければならない
8．（　　）男子正式礼装は羽織の紐だけとりかえれば慶弔両用できる。
9．（　）紬の着物は普通礼装用にならないが、例外的に結城紬のみは略礼装用として着用できる。

② 次の文章の（　　）の中の正しい方に○で囲みなさい。
1．裾除けを着用する場合、裾はくるぶしの（上・下）位に着付ける方がよい。
2．一般的な着付けでは、衣紋の抜き加減は、衿と衿足しとの間にに手のこぶし（一つ・二つ）位は入る程度が適当である。
3．弔事の略式礼装で色無地紋付きを着用した場合、帯は（同色・黒）を使用する。
4．背が高い人は一般に、前帯幅を（広く・狭く）締めた方がよい。
5．男子の正装の場合、たびは（白・黒）をはく。

8．式 服（礼服）

次の説明文のうち、正しいものに○印、誤ってものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）丸帯地で打掛を仕立てる場合、丸帯２本分あればできる。
2．（　　）打掛は普通には、共衿と袖口布をつけない方が正しい。
3．（　　）掛下は、お引きずりに着用するので、身長の1.3倍位の身丈にすると良い。
4．（　　）打掛は吹きが太いので普通には褄の部分で表切り下げはつけない。
5．（　　）ひうちとは、本比翼の前身頃上着八掛と下着のところへ入れる小布である。
6．（　　）打掛は引着として着用するので身丈は身長と同寸にし、おはしょりをしないで着用する。
7．（　　）帷子とは、古くから裏のない単衣物の総称で、今日では夏の麻の着物をいう。
8．（　　）経帷子は、僧侶が読経の時に袈裟の下に着る白衣である。
9．（　　）婦人用単衣本重ねの下着丈は、袷裾回し丈と同じくらいでよい。
10．（　　）総絞りの地の目は通しにくいが、経・緯共に目を通して裁断するのがよい。
11．（　　）付下げの袖の柄は、普通右は後袖、左は前袖にもってくるとよい。
12．（　　）打掛、掛下、踊用引着などは、衿丈の寸法によって褄下寸法を計算してきめる。

9．袴

① 次の文章の（　　）の中に適当な寸法あるいは語句を記入しなさい。
1．袴の前紐丈は胴回りの（　　）位が適当である。
2．身長170㎝標準体の成人男子の袴の紐下寸法は（　　）位を基準として決めるとよい。
3．身長160㎝の女子用袴の紐下寸法は（　　）位がよい。
4．胴回り90㎝、身長165㎝の男子用袴の前紐丈は（　　）位がよい。

② 男物仕舞袴の特徴として正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。〈襠付袴との比較〉
1．（　　）一のひだの奥が浅く、ひだのすぐ内側を綴じ付ける。（流派により異なる）
2．（　　）相引＝紐下×２/３である。
3．（　　）腰板は厚紙である。
4．（　　）襠高が低い。

③ 袴の説明として正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）馬乗袴を行灯袴とも言う。
2．（　　）袴ののぼせは、用尺が足りないときは付けなくてもよい。
3．（　　）男袴の紐下とは、腰板の下部より裾までを言う。
4．（　　）女袴の裾は、約5㎝の切り上げが必要である。

10．帯

① 帯に関する次の説明文の（　　）の中に適当な寸法を記入しなさい。
1．成人男子用の兵児帯は普通絞りや紬の大幅物が多く、帯丈は（　　）位である。
2．丸帯・袋帯は普通帯幅は30～32㎝（8寸～8寸5分）位で帯丈は（　　）位である。
3．標準体型の人が使用する名古屋帯の手柄中心は手先からはかると（　　）位のところにあるとよい。
4．名古屋帯の帯地の用布は普通（　　）位である。
5．胴回り85㎝の女性の名古屋帯の手丈は（　　）位にするとよい。
6．名古屋帯の垂柄中心と手柄中心の間隔は標準体型の女性が着用する場合（　　）位あればよい。

7. 胴回り100cm（2尺6寸4分）の女性の名古屋帯のポケット口中心は手先より（　　）位である。
8. 掛下帯は長さ380～410m（1丈から1丈1尺）位で帯幅は（　　）位のもので別織帯地が、掛下共地を使用する。
9. 名古屋帯の垂柄中心は、垂先から（　　）位である。
10. 袋帯の太鼓柄中心は、垂先から（　　)位である。
11. 男帯(角帯)の帯丈は（　　）位である。

② 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）掛下帯にポイント柄を入れる場合、帯丈の中心に入れるとよい。

11. 子供物

① 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）一反使いの七五三の祝着(中裁ち)は、共裾に仕立てる。
2．（　　）三つ身の片面物の身頃は、通常は追い裁ちになる。
3．（　　）四つ身の着物や羽織は、どちらも前身頃を輪にして裁つとよい。
4．（　　）四つ身長着を別裾回し(八掛)で仕立てる場合、裾回しは並幅で2.3m（6尺）あればできる。
5．（　　）四つ身羽織の衿布は、後身頃を輪にして背から切り落とす。
6．（　　）四つ身羽織の抱紋は、肩揚げの位置や分量を考えて脇へ寄せることもある。
7．（　　）子供用長襦袢には、つまみ衿仕立てと別衿仕立てとがある。

② 次の説明文の（　　）の中に最も適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．男児５才用の祝着は袖に振りをつけ、袂は（　　）である。
2．身長110㎝の子供用着丈の腰揚げ上がり寸法は（　　）位が適当である。
3．身長110㎝の子供用長着の肩揚げ上がり寸法は（　　）位である。
4．元禄袖（筒袖）単一つ身長着は小幅物で（　　）位あればできる。
5．お宮参りの初着の袖は、（　　）である。
6．四つ身羽織の衿は、（　　）よりとる。

③ 各長着の紋下がりの寸法を記入しなさい。（数字は㎝、尺いずれも可）

名　　称	本 裁 男 女	四　つ　身	一　つ　身
背紋下がり	衿付けより		
袖紋下がり	袖山より		
抱き紋下がり	肩山より		

１２．その他

① 次の説明文の（　　）の中に適当な語句を記入しなさい。
1．和裁の作業場で必要な照明として（　　）ルクス位必要である。
2．15アンペアのコンセントからは、適当な接続器を使えば２本差しこてがま（100Ｖ、300W）が（　　）台使える。
3．JIS 規格の繊維用語で、色違いが段状に表れた欠点のことを（　　）という。
4．日本における家庭用電源は、100V（ﾎﾞﾙﾄ）を使用しているので10A（ｱﾝﾍﾟｱ）のコンセントは（　　）W（ﾜｯﾄ）まで使用できる。

② 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（　　）綿入れには「ふり込み仕立て」と「くけ仕立て」があるが、綿入れ前に身八ツ口をとめ、袖を付けておく方法は前者である。
2．（　　）電気器具を使用した時、ヒューズが切れたので細い導線を用いた。
3．（　　）ミシンの上糸を調節する場合、糸調節部分の大きな数字に合わせれば上糸が強くなり、小さな数に合わせれば上糸が弱くなる。
4．（　　）補強用の布を用いる補綴作業は刺し縫いである。
5．（　　）布面の毛羽をかり揃えることを起毛という。
6．（　　）男物綿入れ長着の袖は広口袖である。
7．（　　）綿入れをするとき、綿は入れる布の大きさに広げてから、表布と裏布に挟んで入れる。
8．（　　）表面に膠液の吹きかけてある吹止真綿は、膠液のかけてある側を裏布側になるように入れる。
9．（　　）女物綿入れ長着の寸法、要尺、裁ち方、標付けは女物長着と同じでよい。
10．（　　）男物丹前の掛襟や袖口布は黒八丈、黒こはくなどを用いる。
11．（　　）袢天には必ず黒色の掛襟をかける。
12．（　　）袢天の裾折り返しは、後身頃より、前身頃の方を長くする。
13．（　　）子負い袢天には必ず衽がつく。
14．（　　）丹前の名は、江戸時代の丹前風呂の客に愛用されたことに由来する。
15．（　　）男物袢天には人形がある。
16．（　　）和裁で使用される手縫い針で４の３とか４の２という呼び方は JIS で規定された名称である。
17．（　　）工業用ミシンは全回転カマで縫い速度は毎分6,000針程度で、家庭用ミシンは半回転カマで毎分2,000針以下の縫い速度である。
18．（　　）ミシンに使用する油は、粘度の大きい濃い油のほうが良い。

③ 補綴の種類で誤っている番号を○で囲みなさい。

1．かけつぎ　　2．まわしかけ　　3．つぎあて　　4．刺し縫い

④ 献上博多織物は、特定の五色が使われているが、組み合わせで正し番号を○で囲みなさい。
　１．紫・紅・黄・紺・青
　２．紫・赤・黄・紺・青
　３．茜・赤・橙・紺・青
　４．紫・赤・黄・緑・青

⑤ 着物を仕立てる前に、加工する工程として誤っている番号を○で囲みなさい。
　１．湯通し　　２．湯伸し　　３．水通し　　４．風通し

⑥ 着物の保存方法の記述として、正しい番号を○で囲みなさい。
　１．虫干しは、湿気のない 5月、10月 頃が良い。
　２．和服用たんすに限り、防虫剤を入れなくて良い。
　３．カビの発生の三大原因は、湿度・温度・空気である。
　４．金糸及び銀糸は、防虫剤に触れても変色しない。

１３．裁断図等

（１）男袴を前から見た場合と、後から見た場合の完成図を描き、下記部分がよくわかるようにそれぞれ所定の位置に記号を入れなさい。

① 笹ひだ　② 相引　③ なげ　④ 後腰幅　⑤ 前腰幅　⑥ 付菱　⑦ 三のひだ　⑧ 裏腰　⑨ 前脇幅
⑩ 後丈　⑪ 一のひだ　⑫ 紐下　⑬ 前紐　⑭ 後紐　⑮ 玉ぶち　⑯ 腰板　⑰ 後幅

（２）小幅物12m12㎝（3丈2尺）の反物で五つ紋付きの本裁女物長着を下記指定寸法で追い裁ちにしたい。
裁断図および各部名称、紋の位置および寸法を記せ。

身丈背より出来上がり161㎝（4尺2寸5分）・袖丈出来上がり53㎝（1尺4寸）
繰越2㎝（5分）・褄下でき上がり79.5㎝（2尺1寸）・他標準寸法とする。
（注）上前身頃、上前衿、上前共衿、上前衽裾などの位置を明記し紋の位置がよくわかるようにすること。

（３）並幅物10m（2丈6尺4寸）の袴地で男子用行灯袴を作りたい。裁断図を示せ。

（４）並幅物10m（2丈6尺4寸）の袴地で男子用襠付袴（馬乗袴）を作りたい。裁断図を示せ。

（５）小幅物12m（3丈1尺7寸）で二部式雨コートを作りたい。裁断図を示せ。

（６）小幅物12m50㎝（3丈3尺）の表地で女児用長袖別衽裁（五つ身裁）共裾長着をつくりたい。裁断図を示せ

（７）小幅物4m（1丈5寸）で一つ身単長着を作りたい。裁断図と各部寸法を示せ。
身丈出来上がり90㎝（2尺3寸7分）・袖丈でき上がり25㎝（6寸5分）・他は標準寸法

（８）小幅物11m（2丈9尺）の表地で千代田衿袷半コートが作りたい。裁断図を示せ。

（９）小幅物11m（2丈9尺）の表地で都衿袷半コートを作りたい。裁断図を示せ。

（10）小幅物10m（2尺3寸）の表生地で折衿（ヘチマ衿）袷半コートを作りたい。裁断図を示せ。

（11）小幅物6m（1丈5尺8寸）の表地を使って本裁女物袷羽織が作りたい。表地の裁断図を示せ。
ただし、裄寸法はきもの62.5㎝（1尺6寸5分）とする。

（12）小幅物12m50㎝（3丈3尺）で女児四つ身アンサンブルを作りたい。裁断図を示せ。

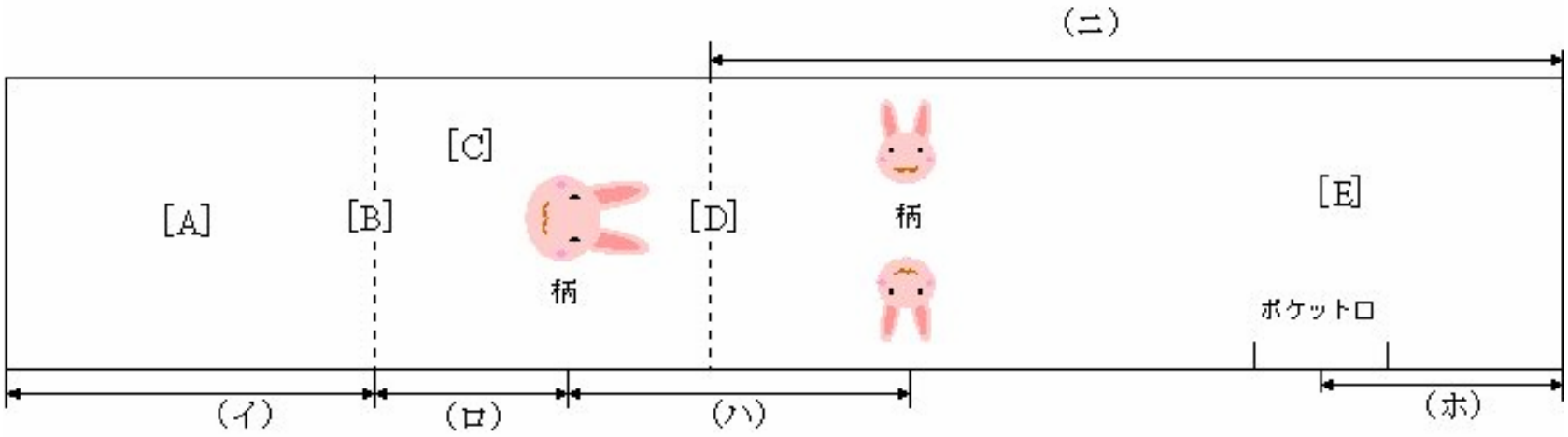
（13）小幅物9.5m（2丈5尺）の表地で道中着を作りたい。裁断図を記入しなさい。

（14）並巾物5m（1丈3尺2寸）の表地で両面物三つ身長着を作りたい。裁断図を記入しなさい

（15）並巾物12m（3丈1尺7寸）の表地で四つ身長襦袢摘まみ衿（摘み衽）を作りたい。裁断図を記入しなさい。

（16）並巾物11m（2丈9尺）の表地本裁男物五つ紋袷羽織を作りたい。裁断図を記入し紋の位置を記入しなさい。
ただし、紋の位置がよくわかるように寸法を明示すること。袖山、肩山は点線で示すこと。

（17）下の図は、普通寸法の名古屋帯地である。［　］の各部の名称および、（　）の寸法を記入しなさい。



［Ａ］……　　（イ）……

［Ｂ］……　　（ロ）……

［Ｃ］……　　（ハ）……

［Ｄ］……　　（ニ）……

［Ｅ］……　　（ホ）……

【解答編】　　職業和裁技能検定１級学科模擬試験問題集

平成19年度

１．基礎知識

① 次の説明文の（　　）の中に適当な語句を記入しなさい。

（１）　レーヨンはパルプやリンターを原料として作られた（ 再生 ）繊維である。
（２）　短繊維を平行に並べて撚りをかけて作った糸を（ 紡績糸 ）という。
（３）　糸の撚り数の密度が１ｍの長さで1,000～3,000回撚ったものを（ 強撚糸 ）という。
（４）　代表的な帯地の一つである（ 魚子織、又は七子織、又は斜子織、又はななこおり ）は、平織の変化組織であるが斜文風に織りあがる。
（５）（ 野蚕絹 ）は家蚕絹に較べ繊維が太く、光沢も強く、強度も大きい。
（６）　生糸のときに、精錬加工をした糸で織ったものを（ 練り織物 ）という。
（７）　鉱物繊維の石綿は（ 天然 ）繊維である。
（８）　眉のような三日月形の草と水玉を組み合わせた模様を（ 露芝 ）という。上巻P31参考
（９）　型染めに使用する型紙は、和紙を数枚張り合わせ、それに（ 柿渋 ）などを塗って耐水性をもたせてある。
（10）　アセテートやトリアセテートは（ 半合成 ）繊維である。
（11）（ ガラス、又は炭素 ）繊維やスチール繊維は無機繊維に属する。
（12）　石油や天然ガスを原料とした中間体化合物を経て作られる繊維を（ 合成 ）繊維という。
（13）　繭から引き出したままの糸は２本の（ フィブロイン ）と、それを包むにかわ質のセリシンでできている。
（14）　糸の太さの表示には番手法と（ デニール法 ）とがある。
（15）　織物の三原組織とは平織り、綾織り(斜文織り)、および（ 繻子織、又は朱子織 ）のことである。
（16）　蚕の繭からとったままの繊維で、まだ精錬を施していないものを（ 生糸 ）という。
（17）　糸の撚りにはＳ撚りとＺ撚りがあり、Ｚ撚りは（ 左撚り ）である。
（18）　鯨尺の1尺2寸は約（ 45.5 ）㎝である。
（19）　異なった素材を混ぜて紡いだ糸を使って織った織物を(混紡織物)という。
（20）　２匹またはそれ以上の蚕が作った繭のことを（ 玉繭 ）という。
（21）　ポリアミド系繊維に対して用いられる一般名は（ ナイロン ）である。
（22）　２匹の蚕が、共同して作った繭から取った糸のことを（ 玉糸 ）という。
（23）　牛車の車輪を文様化したものを（ 源氏車 ）という。
（24）　１デニールとは（ 9,000 ）ｍで１ｇの重みのある糸のことをいう。
（25）　木綿に絹のような光沢をもたせるためにする特殊加工を（ シルケット加工 ）という。
（26）　長襦袢の仕立てで、鳩胸の人は長襦袢を着ると前が上がるので、身八ツ口に（ タック ）をとって前丈を長く取るとよい。
（27）　色の三原色は（ 赤、黄、青 ）、光の三原色は（ 赤、青紫、緑 ）である。
（28）　花・草・樹木などを染色原料として染めたものを（ 草木染 ）という。
（29）　鮫小紋など柄の向きが一方向に向いている時の衿肩明きの切り方は（ 追い裁ち ）にする。
（30）　奈良時代の代表的な染色法で絞り染めのことを（ 纈纈 ）という。

② 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。

１（ ○ ）観世水とは渦を巻いて流れる水を文様化したものである。
２（ × ）唐草文様は日本古来より伝わる代表的な文様で、つる草の絡み合う様子を連続文様にしたものである。
３（ ○ ）吉祥文様はめでたい、えんぎがよい時に用いられる代表的な古典文様で帯などにも広く用いられている。
４（ × ）四君子文様は蘭、竹、菊、桜を組み合わせたものである。
５（ × ）椿の花を図案化した文様を唐草文様という。
６（ ○ ）京小紋は多くの色を使って染められるが、江戸小紋は単色染めが多い。
７（ ○ ）有職文様は、平安時代の宮中において有職者が着用した格調の高い文様である。
８（ × ）野蚕絹には柞蚕絹と天蚕絹があり、前者は緑黄色、後者は茶褐色を帯びている。
９（ ○ ）羊毛の吸湿性は天然繊維の中で最大である。
10（ × ）植物繊維は酸に強く、アルカリ性に弱い。
11（ × ）ろうけつ染めとは、染料にろうを溶かして模様を染める方法である。
12（ × ）七宝文様とは七福神が宝船に乗っている模様である。
13（ × ）亀甲模様とは八角形の亀の甲をみたてたものである。
14（ × ）繊維は大別すると天然繊維と化学繊維に分けられ、天然繊維には動物繊維と鉱物繊維がある。
15（ ○ ）槌模様とは工具の槌を輪の回りに取り付け車状に表したものである。
16（ ○ ）山水文様とは、山水画風に描いた文様である。
17（ ○ ）１個の家蚕繭から取れる生糸の長さは、繭の大小によって差があるが、約600～700ｍ位である。
18（ ○ ）化学繊維は再生繊維、半合成繊維および合成繊維に分類することができ、レーヨンは再生繊維、アセテートは半合成繊維およびポリエステルは合成繊維である。
19（ ○ ）井桁文様とは井戸の井の字を図案化したものである。
20（ ○ ）辻ヶ花とは、絞りと文様を組み合わせたものである。
21（ × ）奈良時代の代表的な染色技術を三纈というが、そのうち纈纈は現在ろうけつ染めとして受け継がれている。
22（ × ）天然繊維や再生繊維は水分率が低く、静電気が起こりやすい。
23（ × ）レーヨンと麻は水に濡れると強度が増す。
24（ × ）市松模様とは松の木を図案化したものである。
25（ ○ ）石綿はアスベストとも言い、鉱物繊維である。
26（ × ）レーヨンは、木綿に比べ色合いよく染まらない。
27（ ○ ）寛文模様は、肩裾の模様をポイントしたものである。
28（ ○ ）三日月形の芝に露の小玉を点々と散らした文様を露芝文様という。
29（ × ）浅葱色（あさぎいろ）とは、淡い黄色のことである。

③ 次の織物の産地を下の語群から選び（　　）の中に番号を記入しなさい。

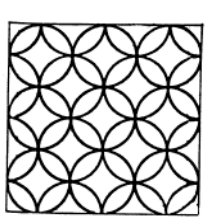
《織物名》

A	紅花紬	（ 5 ）	B	丹後ちりめん	（ 26 ）	C	有松絞り	（ 9 ）	D	能登上布	（ 24 ）
E	久留米絣	（ 14 ）	F	唐棧縞	（ 6 ）	G	米沢お召	（ 5 ）	H	紅型	（ 8 ）
I	厚司織	（ 19 ）	J	松阪木綿	（ 16 ）	K	佐賀錦	（ 13 ）	L	黄八丈	（ 21 ）
M	郡上紬	（ 20 ）	N	村山大島	（ 21 ）	O	八重山上布	（ 8 ）	P	塩沢お召	（ 23 ）
Q	上田紬	（ 12 ）	R	小千谷縮	（ 23 ）	S	紫根染	（ 4 ）	T	備後絣	（ 17 ）
U	仙台平	（ 2 ）	V	大和上布	（ 10 ）	W	伊那紬	（ 12 ）	X	五泉平	（ 23 ）
Y	結城紬	（ 11 ）	Z	大島紬	（ 7 ）	a	足利紬	（ 27 ）	b	弓浜絣	（ 29 ）
c	浜縮緬	（ 15 ）	d	加賀友禅	（ 24 ）	e	阿波しじら	（ 28 ）	f	ぜんまい織り	（ 1 ）
g	久米島紬	（ 8 ）	h	伊予絣	（ 22 ）	i	白山紬	（ 24 ）			

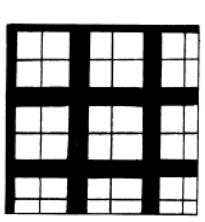
〔産地語群〕

1 秋田県	2 宮城県	3 山梨県	4 岩手県	5 山形県	6 千葉県	7 鹿児島県
8 沖縄県	9 愛知県	10 奈良県	11 茨城県	12 長野県	13 佐賀県	14 福岡県
15 滋賀県	16 三重県	17 広島県	18 静岡県	19 北海道	20 岐阜県	21 東京都
22 愛媛県	23 新潟県	24 石川県	25 高知県	26 京都府	27 栃木県	28 徳島県
29 鳥取県						

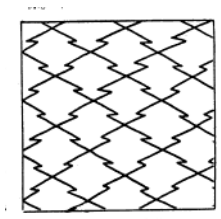
④ 次にあげる文様(模様)の名称を下記語句から選び、該当する欄にその記号を記入し、語句の(　)にふりがなを記入しなさい。



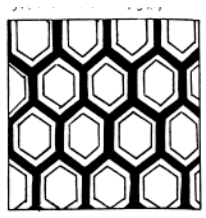
A（ ⑩ ）



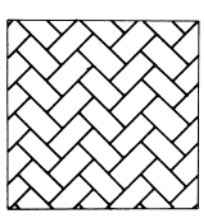
B（ ② ）



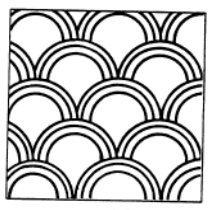
C（ ④ ）



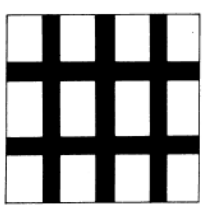
D（ ① ）



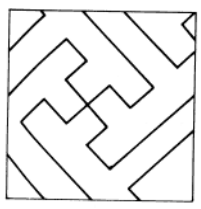
E（ ⑧ ）



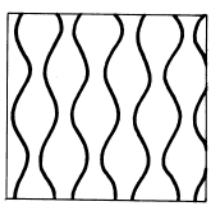
F（ ⑨ ）



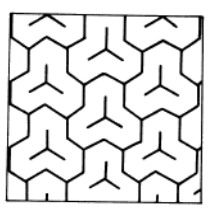
G（ ⑥ ）



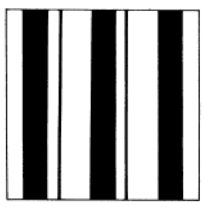
H（ ⑪ ）



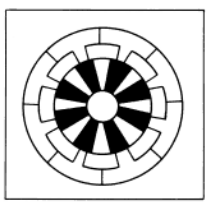
I（ ③ ）



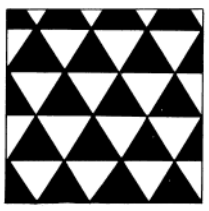
J（ ⑭ ）



K（ ⑬ ）



L（ ⑤ ）



M（ ⑦ ）

N（ ⑫ ）

《語句》① 亀甲　（きっこう）　② 翁格子　（おきなごうし）　③ 立涌　（たてわく）
④ 松皮菱（まつかわびし）　⑤ 源氏車　（げんじぐるま）　⑥ 弁慶格子（べんけいごうし）
⑦ 鱗　（うろこ）　⑧ 檜垣文　（ひがきもん）　⑨ 青海波　（せいかいは）
⑩ 七宝　（しっぽう）　⑪ 紗綾型　（さやがた）　⑫ 観世水　（かんぜすい）
⑬ 子持縞（こもちじま）　⑭ 毘沙門亀甲（びしゃもんきっこう）

2．基礎技術

① 和服の寸法と身体各部の寸法の関係について、記入しなさい。

1．本裁男物長着の身丈＝　身長×0.83 ～ 0.85　又は（身長－25㎝ ～ 27㎝）　を基準とする。
2．本裁女物長着の衿肩明＝　首回り×1/4　を基準とする。
3．本裁女物長着のゆき＝　身長×0.4＋2㎝　又は実測　を基準とする。
4．本裁女物長着の裾下＝　身長×1/2　を基準とする。
5．本裁女物長襦袢の身丈＝　身長×0.8　又は（身長－30㎝）　を基準とする。

② 次の説明文の（　　）の中に適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．身長165㎝の女性の長着の身丈は（ 165㎝ ）位が適当である。
2．身長160㎝の女性の長着のゆきは（ 66㎝ ）位が適当である。
3．身長159㎝の女性の長着の褄下は（ 79.5㎝ ）位が適当である。
4．首回り36㎝の女性の長着の衿肩明きは（ 9㎝ ）位が基準となる。
5．身長163㎝の女性の長襦袢丈は（ 130㎝ ）位が基準となる。
6．婦人用袖付けを付け違いにする場合は（ 前袖付け ）を長くする。

③ 次の文章のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ × ）和服の裄は手首を腰にあて、背の最上部中央から肩線、腕に沿って手首まではかる。
2．（ ○ ）太った人は普通、繰越と衿肩明きは大きくする。
3．（ × ）ハト胸の人は胸幅を広くするために衽下りを多くするとよい。
4．（ ○ ）女物の褄下寸法は衿先に腰紐がかかるようにすると着くずれしにくい。

④ 次にあげる紋の名称を下記語群から選び、該当する欄にその番号を記入し、語群の（　　）にふりがなを記入しなさい。

A（④） B（⑪） C（⑧） D（⑦） E（②） F（⑬） G（⑤） H（⑭） I（⑥） J（⑮） K（①）

【語群】
① 下り藤（あがりふじ）　② 横木瓜（よこもっこう）　③ 五三の桐（ごさんのきり）
④ 花菱（はなびし）　⑤ 抱き茗荷（だきみょうが）　⑥ 揚羽蝶（あげはちょう）
⑦ 三つ柏（みつかしわ）　⑧ 九曜星（くようほし）　⑨ 沢瀉（おもだか）
⑩ 梅鉢（うめばち）　⑪ 蔦（つた）　⑫ 桔梗（ききょう）
⑬ 三ッ葵（みつあおい）　⑭ 丸に井桁（まるにいげた）　⑮笹籠胆（ささりんどう）

3．長 着

① 次の文章のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ ○ ）本裁男物長着の内揚位置は後より前を低くし、その位置は着用時に帯でかくれるように配慮する。
2．（ ○ ）本裁女物長着の裾回しが短尺物の場合、前身頃から袖口布を取るとよい。
3．（ ○ ）両面使える布でなければカギ衽裁ちにできない。
4．（ ○ ）女物長着を仕立てる場合、胸の高い人は肩山から剣先までの傾斜を大きくし身八ツ口も長くした方がよい。

② 次の説明文の（　　）の中に最も適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．本裁女物長着で、共衿２枚取りに裁つ場合、小幅物では約（ 50㎝、又は1尺3寸 ）位、普通より余分に布がいる。
2．本裁女物長着をW幅物で仕立てる場合、布は約2.2m～2.3m（ 6尺 ）位必要とするが、
ヤール幅では（ 4.2m～4.5m、又は1丈1尺5寸～1丈2尺 ）位必要である。
3．婚礼用振袖をお引きずりに着用する場合、身丈は普通、身長＋（ 20㎝、又は5寸 ）位にするとよい。
4．留袖用付け比翼の要尺は小幅物で（ 11.4m、又は3丈 ）位あればできる。

③ 本裁女物長着の柄の配置について注意すべきことを、５つ述べなさい。
(1) 左前身頃の胸に柄をおく。
(2) 左前身頃と左衽の裾から 50～60cm（1 尺 4 寸～1 尺 6 寸）に柄のポイントをおく。
(3) 原則として右袖は後、左袖は前に柄のポイントをおく。
(4) 右後身頃肩に柄のポイントをおく。
(5) 左右の後身頃背とか、脇などで柄が重なったり、ぶつかったりしないようにする。
㊟その他、柄の配置に関する諸注意を列記する。

4．羽 織

① 次の文章の説明が正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ × ）羽織を追い裁ち（順送り裁ち）にする場合、前身頃の柄を上向きにする。
2．（ × ）羽織の衿を鉄砲付けにする場合、前後の襠を付けてから衿付けをする。
3．（ ○ ）単羽織を裁つ場合、普通前落としから袖口布と襠布がとれなければならない。
4．（ ○ ）男の羽織袴姿が礼装になったのは、江戸時代初期である。

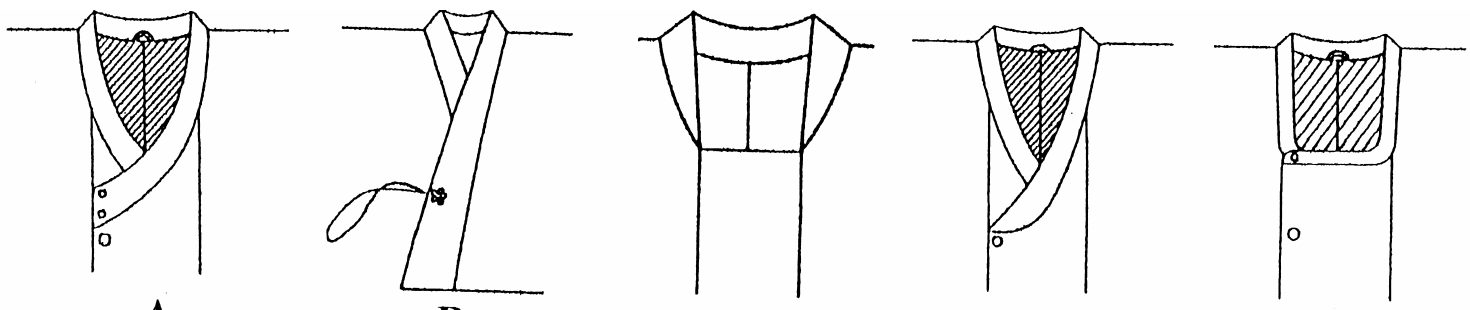
② 次の羽織に関する説明文の（　　）の中に適当な語句、寸法を記入しなさい。
1．半反の反物で羽織を作る場合、普通、前落としを（ 衿 ）に用いる。
2．男物肥満体の羽織の襠にする特殊な工夫を（ 箱襠 ）という。
3．男物羽織のくりこし寸法は普通（ 1.2㎝、又は３分 ）位である。
4．無双羽織の胴接ぎは、前裾か（ 肩山 ）でする。
5．本裁ち女物羽織の身丈は（ 身長×１/２ ）を基準とする。
6．本裁女物羽織の衿布は、羽織丈に（ 27㎝、又は7寸 ）位加えたものを２倍とればできる。

5．コート

① 次の文章の（　　）の中に適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．道行コートや都衿コートの胸明寸法は標準で（23㎝、又は6寸）位である。
2．都衿コートで表要尺が不足した場合、一つの方法として下前身頃裁切り丈を（13㎝、又は3寸）位長くとればできる。
3．雨コートの身丈は（襦袢丈＋2㎝(5 分)）位を基準とし、体型、その他により加減するとよい。
4．千代田衿のコートの表生地は、小衿布分として普通（100㎝～115㎝、又は2尺7寸～3尺）位必要である。

② 次の文章のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ × ）道行き衿の雨コートでは、普通のコートより竪衿下がりを４㎝位少なくする。
2．（ × ）被布衿コートは、襠を付けて仕立てるのが普通である。
3．（ ○ ）千代田衿は都衿より竪衿下がりが少ないので竪衿丈を長くする。

③ 次のコート衿型を（　　）の中に記入しなさい。



A　（ 千代田衿 ）　B　（ 道中 ）　C　（ 被布 ）　D　（ へちま、又は折衿 ）　E　（都、又は角丸）

④ 次の雨コートの縫製に関する記述のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ ○ ）太っている人は、前下がりをつけるとよい。
2．（ × ）やせている人は、胸明を下げるとよい。
3．（ × ）防水加工は、織る前の糸に防水加工をしたものである。
4．（ × ）体形にあわせるため必ず仮縫いをしなければならない。

6．日本服装の変遷

① 次の説明文の（　　）の中に下の語句の中から適当なものを選びその記号を記入しなさい。
1．平安時代の女性の外出姿に（ N ）というのがある。
2．平安時代の貴族階級の女性の正装を晴装束あるいは（ G ）という。
3．現在、着用されている女袴は（ C ）頃より用いられたものである。
4．平安時代の女官の正式礼装である晴装束は、十二単あるいは（ M ）ともいう。
5．素襖（すおう）は武士の礼服であり、紋のついたものを特に（ H ）という。
6．平安時代の公卿の装束は（ S ）である。

《語句》A.昭和時代　B.大正時代　C.明治時代　D.江戸時代　E.室町時代　F.被衣
G.十二単　H.大紋　I.直衣　J.袿姿　K.狩衣　L.石持
M.女房装束　N.壺装束　O.室町時代　P.水干　Q.コート　R.合羽　S.束帯

② 次にあげる左側の語句のふりがなを（　　）の中に記入し、右側の説明文で関連のあるものを線で結びなさい。

纐　纈（こうけち）	1．女官の正装で女房装束あるいは十二単という。
束　帯（そくたい）	2．奈良時代の代表的な染色技法で絞り染めのことである。
直　垂（ひたれ）	3．ポルトガル語が語源で、西洋のマントを真似たもの。
晴装束（はれしょうぞく）	4．武士が鎧下に着用した物で、後に武士の公服となったもの。
合　羽（かっぱ）	5．平安時代を起源とする公卿の正式礼装のことをいう。

③ 次の裃（かみしも）についての記述のうち正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。

ア．（ × ）普通の袴である。

イ．（ ○ ）肩衣（かたぎぬ）と袴である。

ウ．（ × ）肩衣（かたぎぬ）である。

エ．（ × ）宮司がはく特別な袴である。

7．着 装

① 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。

1．（ × ）糸錦、唐錦の丸帯・袋帯は婦人第一礼装用になるが、綴織りのものはそうはならない。
2．（ × ）婦人正式礼装には羽織は着用してはならない。
3．（ ○ ）婦人用色無地紋付長着は帯をかえれば、慶弔いずれの場合も略礼服として着用できる。
4．（ ○ ）鮫小紋の長着に紋を付けていた場合は略礼装として着用できる。
5．（ ○ ）被布は室内で着用できるが、被布衿コートは室内での着用が認められない。
6．（ ○ ）絵羽織は礼装用として用いられる。
7．（ ○ ）黒喪服には必ず黒の帯しめと黒の帯あげを用いなければならない
8．（ ○ ）男子正式礼装は羽織の紐だけとりかえれば慶弔両用できる。
9．（ × ）紬の着物は普通礼装用にならないが、例外的に結城紬のみは略礼装用として着用できる。

② 次の文章の（　　）の中の正しい方に○で囲みなさい。

1．裾除けを着用する場合、裾はくるぶしの（上・下）位に着付ける方がよい。
2．一般的な着付けでは、衣紋の抜き加減は、衿と衿足しとの間に手のこぶし（一つ・二つ）位は入る程度が適当である。
3．弔事の略式礼装で色無地紋付きを着用した場合、帯は（同色・黒）を使用する。
4．背が高い人は一般に、前帯幅を（広く・狭く）締めた方がよい。
5．男子の正装の場合、たびは（白・黒）をはく。

8．式 服（礼服）

次の説明文のうち、正しいものに○印、誤ってものに×印を（　　）の中に記入しなさい。

1．（ ○ ）丸帯地で打掛を仕立てる場合、丸帯２本分あればできる。
2．（ ○ ）打掛は普通には、共衿と袖口布をつけない方が正しい。
3．（ × ）掛下は、お引きずりに着用するので、身長の1.3倍位の身丈にすると良い。
4．（ × ）打掛は吹きが太いので普通には褄の部分で表切り下げはつけない。
5．（ ○ ）ひうちとは、本比翼の前身頃上着八掛と下着のところへ入れる小布である。
6．（ × ）打掛は引着として着用するので身丈は身長と同寸にし、おはしょりをしないで着用する。
7．（ ○ ）帷子とは、古くから裏のない単衣物の総称で、今日では夏の麻の着物をいう。
8．（ × ）経帷子は、僧侶が読経の時に袈裟の下に着る白衣である。
9．（ × ）婦人用単衣本重ねの下着丈は、袷裾回し丈と同じくらいでよい。
10．（ × ）総絞りの地の目は通しにくいが、経・緯共に目を通して裁断するのがよい。
11．（ ○ ）付下げの袖の柄は、普通右は後袖、左は前袖にもってくるとよい。
12．（ ○ ）打掛、掛下、踊用引着などは、衿丈の寸法によって褄下寸法を計算してきめる。

9．袴

① 次の文章の（　　）の中に適当な寸法あるいは語句を記入しなさい。

1．袴の前紐丈は胴回りの（ 4倍 ）位が適当である。
2．身長170㎝標準体の成人男子の袴の紐下寸法は（ 85㎝～87㎝ 又は２尺２寸～２尺３寸 ）位を基準として決めるとよい。
3．身長160㎝の女子用袴の紐下寸法は（ 93㎝ ）位がよい。
4．胴回り90㎝、身長165㎝の男子用袴の前紐丈は（ 3.6ｍ、又は9尺5寸 ）位がよい。

② 男物仕舞袴の特徴として正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。〈襠付袴との比較〉
1．（ ○ ）一のひだの奥が浅く、ひだのすぐ内側を綴じ付ける。（流派により異なる）
2．（ × ）相引＝紐下×２/３である。
3．（ × ）腰板は厚紙である。
4．（ × ）襠高が低い。

③ 袴の説明として正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ × ）馬乗袴を行灯袴とも言う。
2．（ ○ ）袴ののぼせは、用尺が足りないときは付けなくてもよい。
3．（ × ）男袴の紐下とは、腰板の下部より裾までを言う。
4．（ × ）女袴の裾は、約5㎝の切り上げが必要である。

10．帯

① 帯に関する次の説明文の（　　）の中に適当な寸法を記入しなさい。
1．成人男子用の兵児帯は普通絞りや紬の大幅物が多く、帯丈は（ 3.8m、又は1丈 ）位である。
2．丸帯・袋帯は普通帯幅は30～32㎝（8寸～8寸5分）位で帯丈は（ 4.2m、又は1丈1尺 ）位である。
3．標準体型の人が使用する名古屋帯の手柄中心は手先からはかると（ 190㎝、又は5尺 ）位のところにあるとよい。
4．名古屋帯の帯地の用布は普通（ 4.6m～4.8m、又は1丈2尺～1丈2尺5寸 ）位である。
5．胴回り85㎝の女性の名古屋帯の手丈は（ 245㎝、又は6尺5寸 ）位にするとよい。
6．名古屋帯の垂柄中心と手柄中心の間隔は標準体型の女性が着用する場合（ 95㎝、又は2尺5寸 ）位あればよい。
7．胴回り100cm（2尺6寸4分）の女性の名古屋帯のポケット口中心は手先より（ 112㎝、又は2尺9寸5分 ）位である。
8．掛下帯は長さ380～410m（1丈から1丈1尺）位で帯幅は（ 26.5㎝、又は7寸 ）位のもので別織帯地が、掛下共地を使用する。
9．名古屋帯の垂柄中心は、垂先から（ 68㎝、又は1尺8寸 ）位である。
10．袋帯の太鼓柄中心は、垂先から（ 133㎝、又は3尺5寸)位である。
11．男帯(角帯)の帯丈は（ 4.0m～4.2m、又は1丈5寸～1丈1尺 ）位である。

② 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ ○ ）掛下帯にポイント柄を入れる場合、帯丈の中心に入れるとよい。

11．子供物

① 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。
1．（ ○ ）一反使いの七五三の祝着(中裁ち)は、共裾に仕立てる。
2．（ ○ ）三つ身の片面物の身頃は、通常は追い裁ちになる。
3．（ × ）四つ身の着物や羽織は、どちらも前身頃を輪にして裁つとよい。
4．（ ○ ）四つ身長着を別裾回し(八掛)で仕立てる場合、裾回しは並幅で2.3m（6尺）あればできる。
5．（ × ）四つ身羽織の衿布は、後身頃を輪にして背から切り落とす。
6．（ ○ ）四つ身羽織の抱紋は、肩揚げの位置や分量を考えて脇へ寄せることもある。
7．（ ○ ）子供用長襦袢には、つまみ衿仕立てと別衿仕立てとがある。

② 次の説明文の（　　）の中に最も適当な寸法、語句を記入しなさい。
1．男児５才用の祝着は袖に振りをつけ、袂は（ 角 ）である。
2．身長110㎝の子供用着丈の腰揚げ上がり寸法は（ 88㎝ ）位が適当である。
3．身長110㎝の子供用長着の肩揚げ上がり寸法は（ 46㎝ ）位である。
4．元禄袖（筒袖）単一つ身長着は小幅物で（ 3.8m～4m、又は1丈 ）位あればできる。
5．お宮参りの初着の袖は、（ 大名袖 ）である。
6．四つ身羽織の衿は、（ 前身頃 ）よりとる。

③ 各長着の紋下がりの寸法を記入しなさい。（数字は㎝、尺いずれも可）

名　　称	本 裁 男 女	四　つ　身	一　つ　身
背紋下がり	衿付けより　5.7㎝、又は1寸5分	4.5㎝、又は1寸2分	4㎝、又は1寸
袖紋下がり	袖山より　7.5㎝、又は2寸	6.5㎝、又は1寸7分	6㎝、又は1寸6分
抱き紋下がり	肩山より　15㎝、又は4寸	13㎝、又は3寸5分	11㎝、又は3寸

１２．その他

① 次の説明文の（　　）の中に適当な語句を記入しなさい。

１．和裁の作業場で必要な照明として（ 300～1,500 ）ルクス位必要である。
２．15アンペアのコンセントからは、適当な接続器を使えば２本差しこてがま（100Ｖ、300W）が（ 5 ）台使える。
３．JIS 規格の繊維用語で、色違いが段状に表れた欠点のことを（ 色段、又は いろだん ）という。
４．日本における家庭用電源は、100V（ﾎﾞﾙﾄ）を使用しているので10A（ｱﾝﾍﾟｱ）のコンセントは（ 1,000 ）W（ﾜｯﾄ）まで使用できる。

② 次の説明文のうち、正しいものに○印、誤っているものに×印を（　　）の中に記入しなさい。

1.（ ○ ）綿入れには「ふり込み仕立て」と「くけ仕立て」があるが、綿入れ前に身八ツ口をとめ、袖を付けておく方法は前者である。
2.（ × ）電気器具を使用した時、ヒューズが切れたので細い導線を用いた。
3.（ ○ ）ミシンの上糸を調節する場合、糸調節部分の大きな数字に合わせれば上糸が強くなり、小さな数に合わせれば上糸が弱くなる。
4.（ × ）補強用の布を用いる補綴作業は刺し縫いである。
5.（ × ）布面の毛羽をかり揃えることを起毛という。
6.（ × ）男物綿入れ長着の袖は広口袖である。
7.（ × ）綿入れをするとき、綿は入れる布の大きさに広げてから、表布と裏布に挟んで入れる。
8.（ × ）表面に膠液の吹きかけてある吹止真綿は、膠液のかけてある側を裏布側になるように入れる。
9.（ ○ ）女物綿入れ長着の寸法、要尺、裁ち方、標付けは女物長着と同じでよい。
10.（ ○ ）男物丹前の掛襟や袖口布は黒八丈、黒こはくなどを用いる。
11.（ × ）袢天には必ず黒色の掛襟をかける。
12.（ × ）袢天の裾折り返しは、後身頃より、前身頃の方を長くする。
13.（ × ）子負い袢天には必ず衽がつく。
14.（ ○ ）丹前の名は、江戸時代の丹前風呂の客に愛用されたことに由来する。
15.（ × ）男物袢天には人形がある。
16.（ × ）和裁で使用される手縫い針で４の３とか４の２という呼び方は JIS で規定された名称である。
17.（ ○ ）工業用ミシンは全回転カマで縫い速度は毎分6,000針程度で、家庭用ミシンは半回転カマで毎分2,000針以下の縫い速度である。
18.（ × ）ミシンに使用する油は、粘度の大きい濃い油のほうが良い。

③ 補綴の種類で誤っている番号を○で囲みなさい。

１．かけつぎ　　(2)．まわしかけ　　３．つぎあて　　４．刺し縫い

④ 献上博多織物は、特定の五色が使われているが、組み合わせで正し番号を○で囲みなさい。

１．紫・紅・黄・紺・青
(2)．紫・赤・黄・紺・青
３．茜・赤・橙・紺・青
４．紫・赤・黄・緑・青

⑤ 着物を仕立てる前に、加工する工程として誤っている番号を○で囲みなさい。

１．湯通し　　２．湯伸し　　３．水通し　　(4)．風通し

⑥ 着物の保存方法の記述として、正しい番号を○で囲みなさい。

(1)．虫干しは、湿気のない 5月、10月 頃が良い。
２．和服用たんすに限り、防虫剤を入れなくて良い。
３．カビの発生の三大原因は、湿度・温度・空気である。
４．金糸及び銀糸は、防虫剤に触れても変色しない。

１３，裁断図等　　下巻Ｐ153

（１）男袴を前から見た場合と、後から見た場合の完成図を描き、下記部分がよくわかるようにそれぞれ所定の位置に記号を入れなさい。

① 笹ひだ　② 相引　③ なげ　④ 後腰幅　⑤ 前腰幅　⑥ 付菱　⑦ 三のひだ　⑧ 裏腰　⑨ 前脇幅
⑩ 後丈　⑪ 一のひだ　⑫ 紐下　⑬ 前紐　⑭ 後紐　⑮ 玉ぶち　⑯ 腰板　⑰ 後幅

（２）小幅物 12m12cm（3 丈 2 尺）の反物で五つ紋付きの本裁女物長着を下記指定寸法で追い裁ちにしたい。
裁断図および各部名称、紋の位置および寸法を記せ。

身丈背より出来上がり 161cm（4 尺 2 寸 5 分）・袖丈出来上がり 53cm（1 尺 4 寸）
繰越 2cm（5 分）・褄下でき上がり 79.5cm（2 尺 1 寸）・他標準寸法とする。
（注）上前身頃、上前衿、上前共衿、上前衽裾などの位置を明記し紋の位置がよくわかるようにすること。
袖 150×4　　身頃 450×4　　衿・衽 400×2

（３）並幅物 10m（2 丈 6 尺 4 寸）の袴地で男子用行灯袴を作りたい。裁断図を示せ。下巻Ｐ156

（４）並幅物 10m（2 丈 6 尺 4 寸）の袴地で男子用襠付袴（馬乗袴）を作りたい。裁断図を示せ。下巻 P 175

（５）小幅物 12m（3 丈 1 尺 7 寸）で二部式雨コートを作りたい。裁断図を示せ。上巻 P 248

（６）小幅物 12m50cm（3 丈 3 尺）の表地で女児用長袖別衽裁（五つ身裁）共裾長着をつくりたい。裁断図を示せ。下巻 P 375

（７）小幅物 4m（1 丈 5 寸）で一つ身単長着を作りたい。裁断図と各部寸法を示せ。
身丈出来上がり 90cm（2 尺 3 寸 7 寸）・袖丈でき上がり 25cm（6 寸 5 分）・他は標準寸法。下巻 P 335
衿幅 3.8cm（1 寸）　衽下り 9.5cm（2 寸 5 分）　褄下 25cm（6 寸 5 分）　衿肩明き 3.8cm（1 寸）
袖 75×4　衿 30　衽 230　身頃 245×2

（８）小幅物 11m（2 丈 9 尺）の表地で千代田衿袷半コートが作りたい。裁断図を示せ。下巻 P266

（９）小幅物 11m（2 丈 9 尺）の表地で都衿袷半コートを作りたい。裁断図を示せ。下巻 P256

（10）小幅物 10m（2 尺 3 寸）の表生地で折衿（ヘチマ衿）袷半コートを作りたい。裁断図を示せ。下巻 P271

（11）小幅物 6m（1 丈 5 尺 8 寸）の表地を使って本裁女物袷羽織が作りたい。表地の裁断図を示せ

ただし、裄寸法はきもの 62 .5cm（1 尺 6 寸 5 分）とする。ハンドブック P70　半反羽織

（12）小幅物 12m50cm（3 丈 3 尺）で女児四つ身アンサンブルを作りたい。裁断図を示せ。下巻 P404
着物は背欠き摘み衽　　羽織は前衿裁ちにし背から袖口・襠を欠きだす

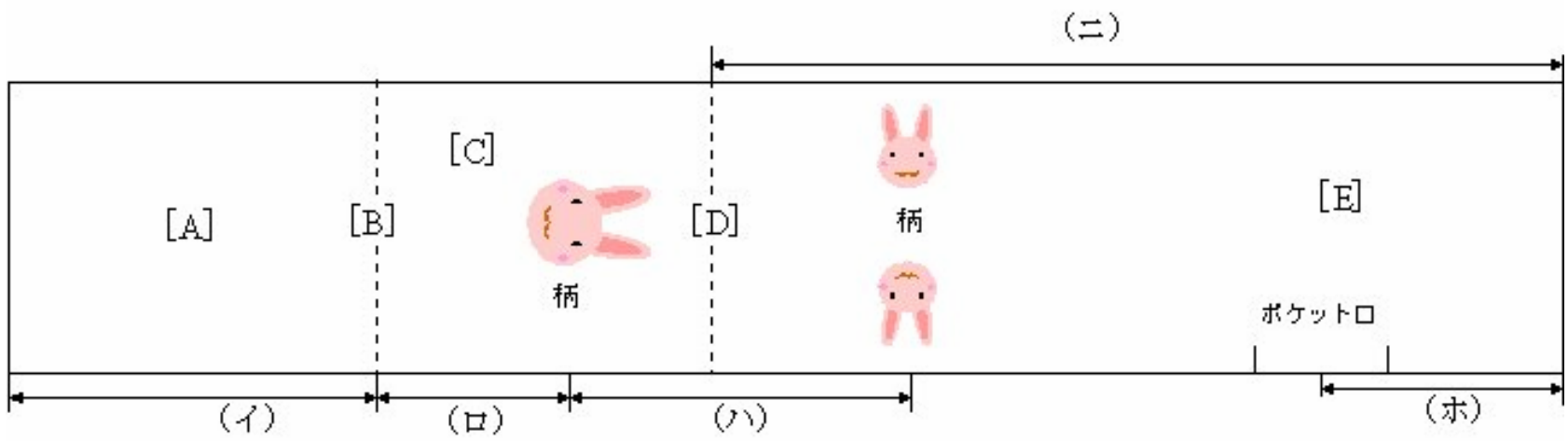
（13）小幅物 9.5m（2 丈 5 尺）の表地で道中着を作りたい。裁断図を記入しなさい。上巻 P251

（14）並巾物 5m（1 丈 3 尺 2 寸）の表地で両面物三つ身長着を作りたい。裁断図を記入しなさい。下巻 P361

（15）並巾物 12m（3 丈 1 尺 7 寸）の表地で四つ身長襦袢摘まみ衿（摘み衽）を作りたい。裁断図を記入しなさい。下巻 P326

（16）並巾物 11m（2 丈 9 尺）の表地本裁男物五つ紋袷羽織を作りたい。裁断図を記入し紋の位置を記入しなさい。
ただし、紋の位置がよくわかるように寸法を明示すること。袖山、肩山は点線で示すこと。
上巻 P220　紋の位置　ハンドブック P115　　抱き紋下がり 4 寸　抱き紋の幅は前落とし側から 6 寸

（17）下の図は、普通寸法の名古屋帯地である。〔　　〕に各部の名称および、（　　）に寸法を記入しなさい。



〔A〕垂裏　　（イ）114cm（ 3 尺 ）

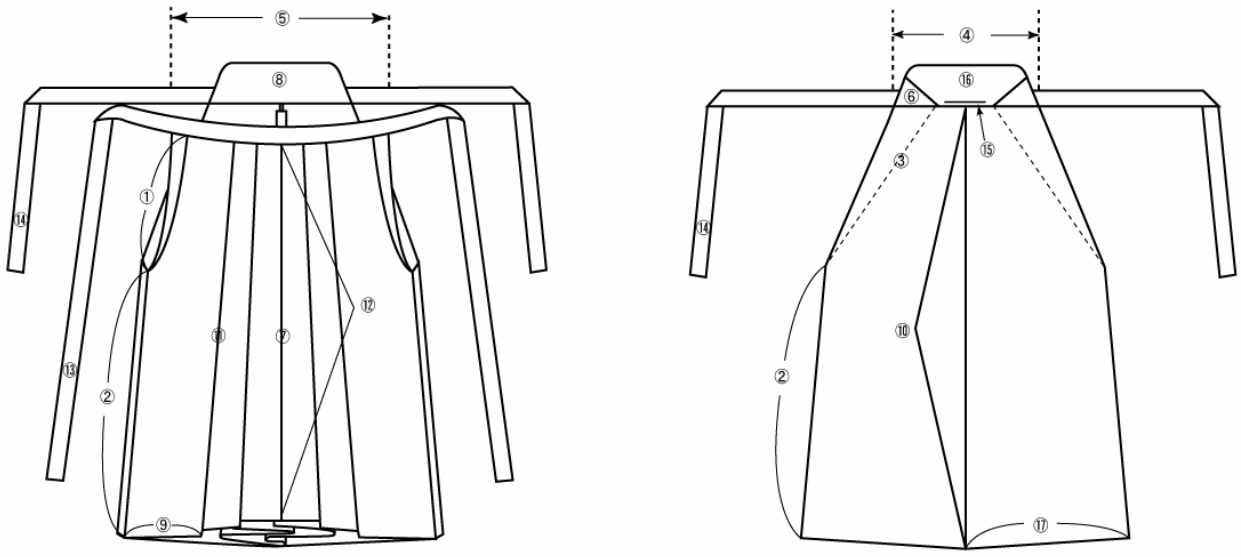
〔B〕垂先　　（ロ）68cm (1 尺 8 寸)

〔C〕垂表（太鼓）　　（ハ）95cm（2 尺 5 寸）

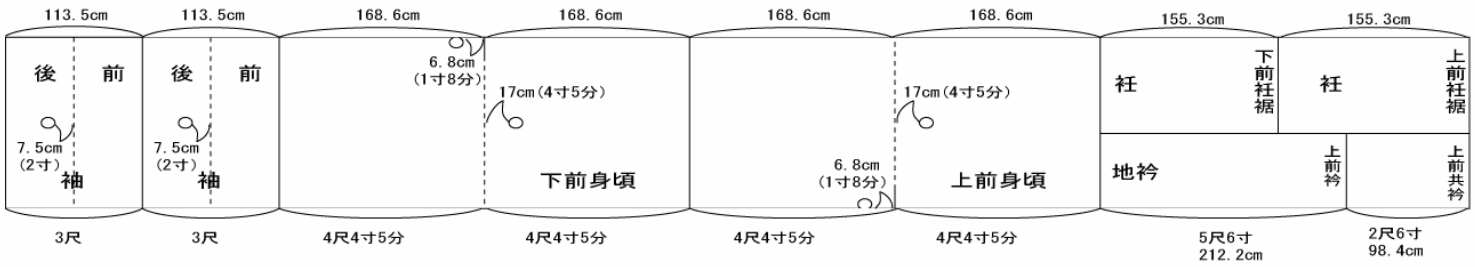
〔D〕垂境　　（ニ）227～240cm（6 尺～6 尺 8 寸）

〔E〕手（胴）　　（ホ）100cm（2 尺 6 寸）

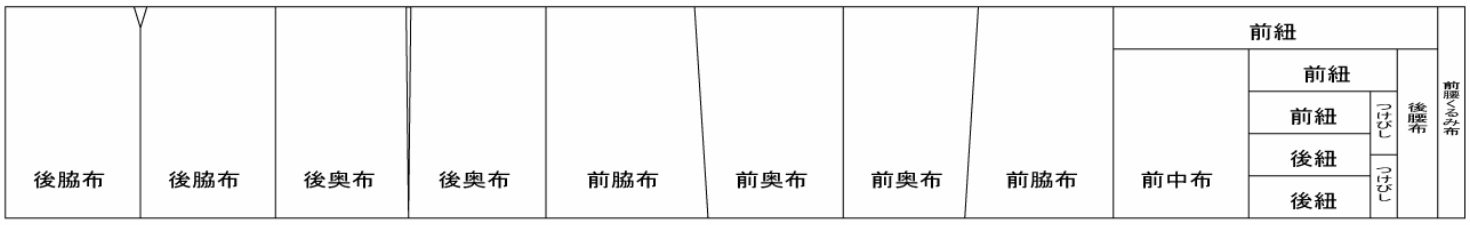
(1)


⑤
⑧
①
⑭
⑫
⑪
⑦
⑬
②
⑨
④
⑯
⑥
③
⑮
⑭
⑩
②
⑰

(2)


113.5cm
113.5cm
168.6cm
168.6cm
168.6cm
168.6cm
155.3cm
155.3cm
後
前
後
前
6.8cm
(1寸8分)
17cm(4寸5分)
17cm(4寸5分)
7.5cm
(2寸)
7.5cm
(2寸)
6.8cm
(1寸8分)
袖
袖
下前身頃
上前身頃
衽
下前衽裾
衽
上前衽裾
地衿
上前衿
上前共衿
3尺
3尺
4尺4寸5分
4尺4寸5分
4尺4寸5分
4尺4寸5分
5尺6寸
212.2cm
2尺6寸
98.4cm

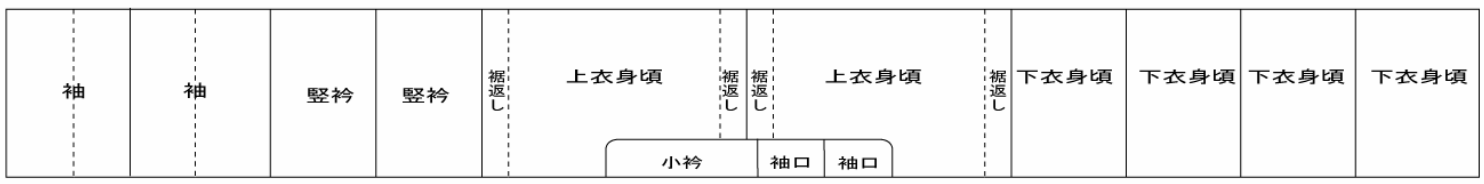
(3)


後脇布
後脇布
後奥布
後奥布
前脇布
前奥布
前奥布
前脇布
前紐
前中布
前紐
前紐
つけひも
後紐
つけひも
後紐
後腰布
前腰くるみ布

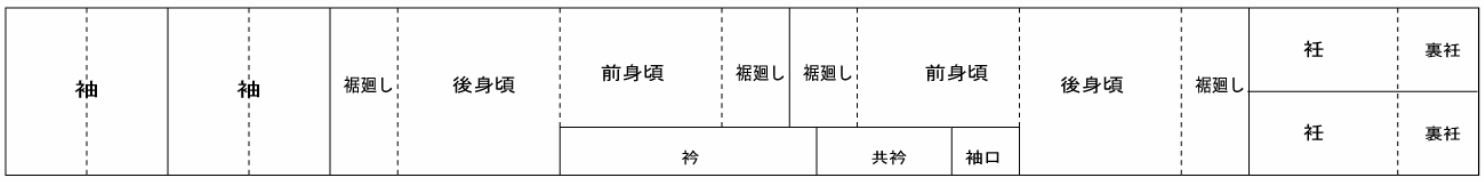
(4)

後脇布
後脇布
前脇布
前奥布
前奥布
前脇布
後襠布
付菱
前襠布
後腰布
後紐
後紐
前紐
前紐
後腰布
前襠布
付菱
前紐
後襠布
前腰くるみ布

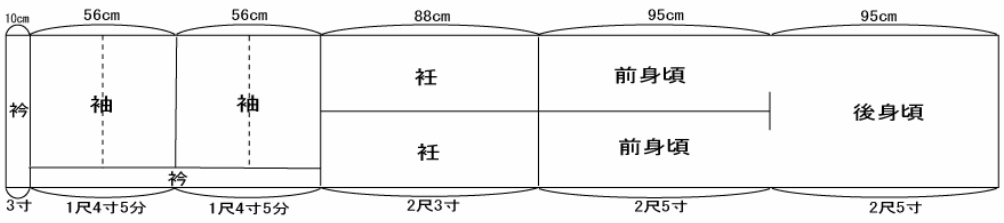
(5)


袖
袖
竪衿
竪衿
裾返し
上衣身頃
裾返し
裾返し
上衣身頃
裾返し
小衿
袖口
袖口
下衣身頃
下衣身頃
下衣身頃
下衣身頃

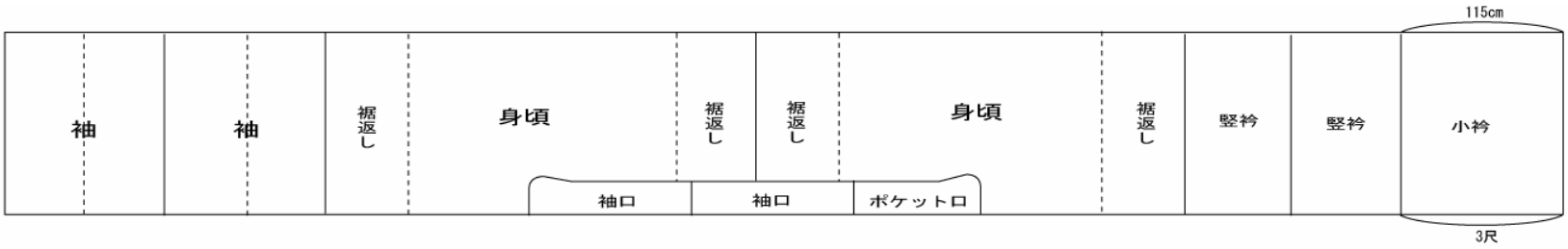
(6)


袖
袖
裾廻し
後身頃
前身頃
裾廻し
裾廻し
前身頃
後身頃
裾廻し
衿
共衿
袖口
衽
裏衽
衽
裏衽

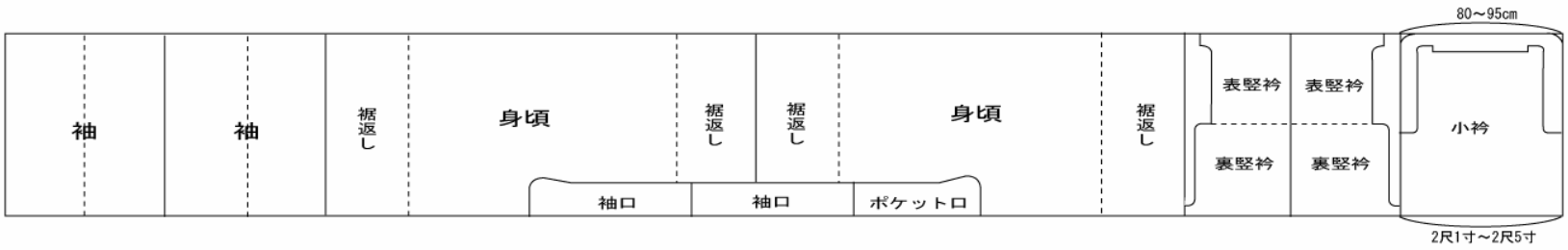
(7)


10cm
56cm
56cm
88cm
95cm
95cm
衿
袖
袖
衽
前身頃
後身頃
衽
前身頃
衿
3寸
1尺4寸5分
1尺4寸5分
2尺3寸
2尺5寸
2尺5寸

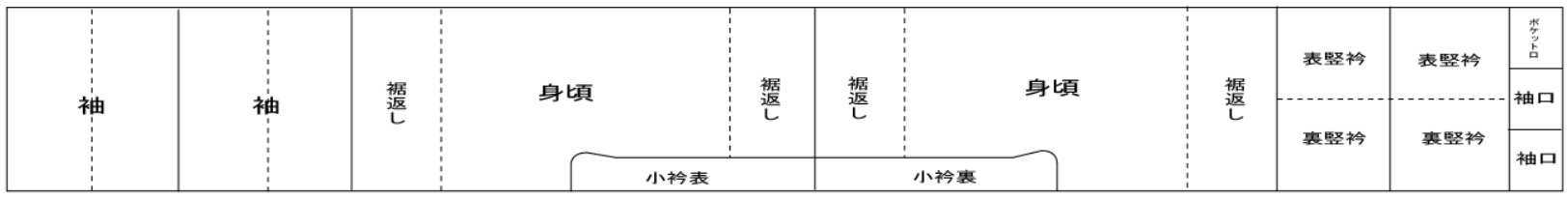
(8)



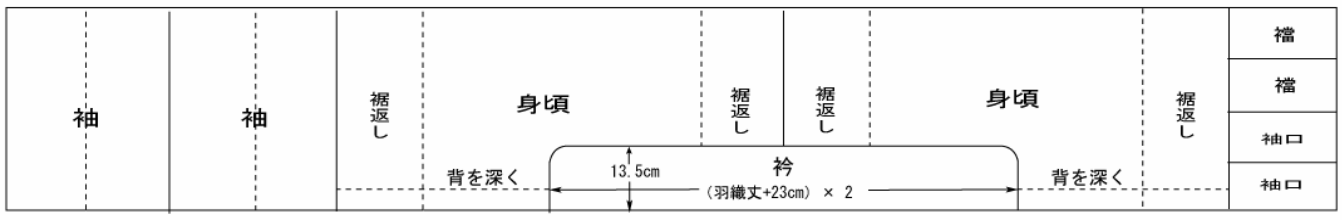
(9)



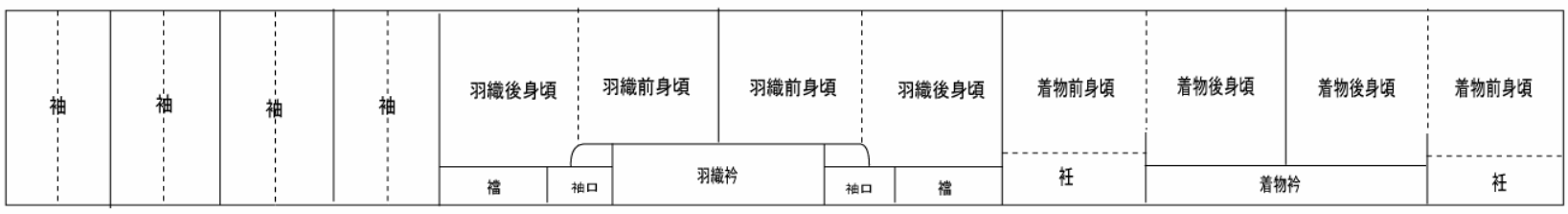
(10)



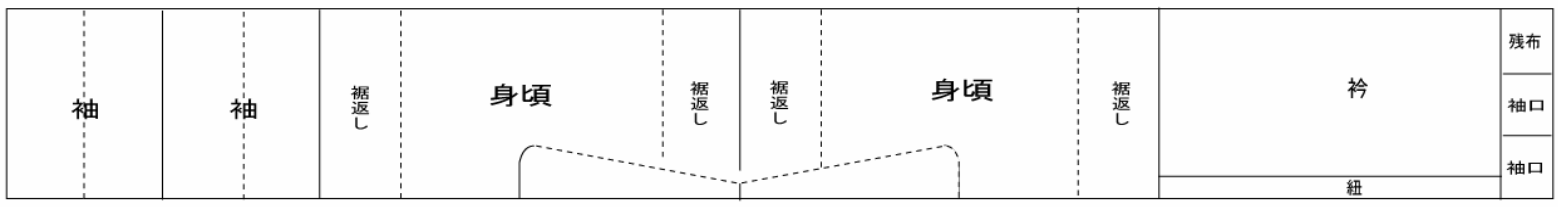
(11)



(12)

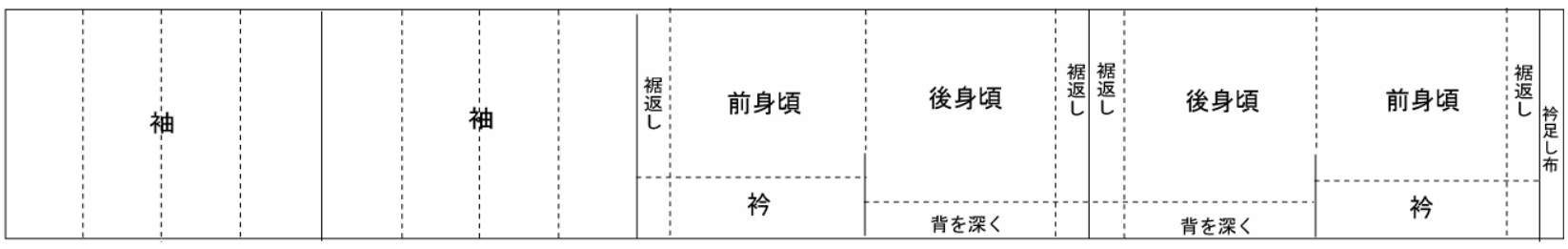
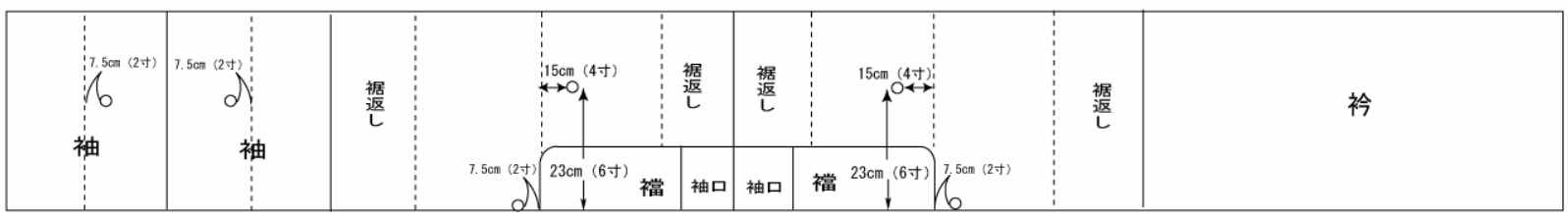


(13)



(14)

(15)



(16)